

排水対策と土づくりは、大豆の初期生育を促進させ、収量・品質の向上につながる重要な作業です。播種前に必ず行いましょう。

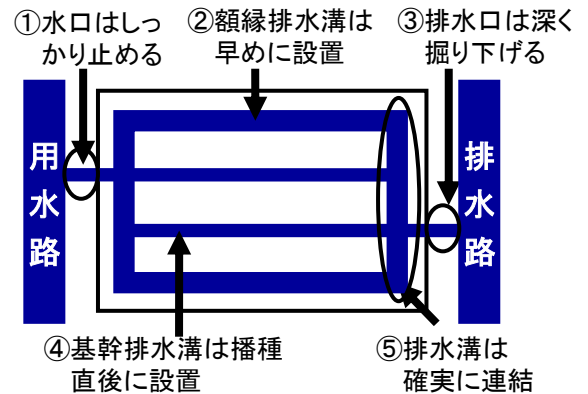
また、昨年、莢先熟株が発生したところでは、基肥量の減肥や極端に早い播種を避けるなど計画的に作業を進めましょう。

栽培のポイント

- 額縁排水溝の設置などによる排水対策の徹底
- 石灰質資材と有機物の施用による土づくり
- 播種時期や播種量等の調整による丁寧な播種作業の実施

1. 排水溝の設置

- ・水口はしっかりと止め、水が入らないようにしましょう。
- ・耕起前に深さ20cm以上の額縁排水溝を必ず設置しましょう。
- ・播種直後に基幹排水溝を設置し、排水溝や深く掘り下げた排水口と必ず連結しましょう。
- ・播種後も排水溝の点検・手直しをするなど、ほ場に水がたまらないようにしましょう。



2. 土づくりの実施

①有機物の施用

- ・大豆の作付回数が増加に伴い、地力が低下しています。収量・品質の向上を図るため、堆肥や発酵鶏ふん等の有機物を積極的に施用しましょう。

②石灰質資材の施用

- ・近年、土壌pHが低下しています。大豆の生育に適した土壌pH6.0～6.5を目標に石灰質資材を施用し、生育量を確保しましょう。

【有機物施用の目安】

資材名	散布量(10a当たり)
牛ふん堆肥	1～2t
発酵鶏ふん	75～150kg

【石灰質資材施用の目安】

資材名	散布量(10a当たり)
苦土石灰	100kg

3. 種子の準備

- ・種子は、「毎年」更新しましょう。
- ・紫斑粒やフタスジヒメハムシ等の病害虫発生防止のため、種子消毒は必ず行いましょう。

薬剤名	使用液量	対象病害虫
クルーザーMAXX	乾燥種子10kg 当たり80ml	アブラムシ類、タネバエ、ネキリムシ類、フタスジヒメハムシ 紫斑病、茎疫病、黒根腐病、リゾクトニア根腐病、苗立枯病(ピシウム菌)

4. 播種作業

- ・耕起、砕土・整地、播種、作溝の一連の作業は、好天日には場が乾いている状態で行い、1日で終えましょう。
- ・播種作業はゆっくり丁寧に行い、砕土率（60%以上）と播種精度を高めましょう。
- ・作業速度が速くなると欠株が多くなるので、0.5m/秒程度の速度（3連の播種機で、30aのほ場を70分程度）で播種しましょう。
- ・畦立同時播種や排水溝の設置により湿害を防ぎ、出芽・苗立の安定化に努めましょう。
- ・播種深度は3cmを目安に播種機を調整し、種子が露出しないようにしましょう。

「えんれいのそら」は、従来の「エンレイ」より収穫時期が5日程度遅くなるので、収穫時期に注意して計画的に播種しましょう。



【播種量の目安】

品種名	播種時期	栽植本数(本/10a)	播種量(kg/10a)
えんれいのそら	5月6半旬～6月上旬	14,000～16,000	5.5～6.3
	6月中旬	16,000～18,000	6.3～7.1
シュウレイ	5月6半旬～6月上旬	12,000～15,000	5.3～6.6
	6月中旬	15,000～18,000	6.6～7.9
オオツル	6月上旬	10,000～12,000	4.5～5.4
	6月中旬	12,000～14,000	5.4～6.3

品種、播種時期に応じた種子を準備し、目標の栽植本数を確保しましょう！

※百粒重（大粒）：えんれいのそら：35.6g、シュウレイ：39.4g、オオツル：40.2g ※苗立率90%

※シュウレイやオオツルは、栽植本数が多くなりすぎると曇化（つるぼけ）や百粒重が低下しやすいので注意しましょう。

5. 基肥量の目安

- ・基肥は、土壤条件等に基づいて、適正な量を施用しましょう。
- ・昨年度、莢先熟が多発した地域では、基肥量を減肥するとともに、極端に早い播種は避けましょう。

肥料名	10a当たり施用量(kg)	
	単作	麦跡
化成肥料オール14	20～25	35～45
BB基肥084	28～35	50～60

砂壤土地帯を中心にカリ成分が不足しています。そのようなところでは、「**BB基肥084**」を積極的に施用しましょう。

6. 除草剤の散布

- ・播種後、速やかに除草剤を散布し、雑草の発生を抑えましょう。

除草剤名	散布量	注意点
エコトップP乳剤	500ml/10a (希釈水量:100ℓ)	・除草効果を高めるために、土壤の砕土率を高めましょう。 ・散布直後の多雨は薬害を生じる恐れがあるため、天候を見極めて散布しましょう。
エコトップP細粒剤F	4～6kg/10a	